松　山　大　学　論　集
第 20 巻 第 6 号 抜 刷
２００９ 年 2 月 発 行

英米文学鳥類考：鶏について

桝　　田　　隆　　宏

英米文学鳥類考：鶏について*

桝　田　隆　宏

1

「鶏(にわとり)が先か，卵が先か（Which came first, the chicken or the egg ?)」という国際的に有名な言葉を見るまでもなく，古今東西「卵」と言えば「鶏」である。また我が国で一般に「トリ」と言えば，「鳥類の総称」を別にすれば「特にニワトリの称［呼び名］」[1] を意味する。これは取りも直さず日本人にとっても，「鶏」が「卵」と同様，実に身近な存在であったことの証である。それは，生まれ年や年賀状で用いられる干支(えと)の十二支（獣）を見ても明らかである。その十二支の動物とは，子(ね)（鼠），丑(うし)（牛），寅(とら)（虎），卯(う)（兎），辰(たつ)（竜），巳(み)（蛇），午(うま)（馬），未(ひつじ)（羊），申(さる)（猿），酉(とり)（鶏），戌(いぬ)（犬），亥(い)（猪）であり，これは小学生でも知っている。

にもかかわらず，「では鶏とはどんな鳥……？」と改めて問われると，大方の人は返答に窮する。というのも，今の我が国では卵用種の鶏でさえ一般庶民にとって，もはや身近な存在とは言えないからである。筆者の住む土佐の高知は尾長鶏(おながどり)，東天紅(とうてんこう)，鶉矮鶏(うずらちゃぼ)などの名鳥を作出した土地であり，古来知る人ぞ知る鳥文化のメッカであるが，それも今は昔の話である。これらの鶏は本家の地元でさえも幻の珍鳥であり，一般庶民が日常的に目にする機会はまずない。高知県香美市土佐山田町の「龍河洞(りゅうがどう)珍鳥センター」でかろうじて目にすることが出来るのみである。したがって本論に入る前に，先ず《鶏》とはどんな鳥なのか，その概要を見ておく必要がある。幾つかの文献で具体的に見てみよう。

① 小学館『国語大辞典』

（「庭の鳥」の意）キジ科の鳥。古くから世界各地で最も広く飼育されている家禽で，原種は現在東南アジアに分布するセキショクヤケイとされる。翼は小さくてよく飛べないが足が強く，くちばしは太くて短い。頭頂にある鶏冠（とさか）は品種の区別に役立つ。品種改良の結果，種類は多く，コーチン・ブラマ・シャモなどの肉用種，レグホン・ミノルカなどの卵用種，プリマスロック・名古屋などの卵肉兼用種，チャボ・オナガドリなどの愛玩用種などがあり，形態や色彩は品種によって異なる。くたかけ。とり[2]。

② 平凡社『世界大百科事典』

キジ目キジ科ニワトリ属の鳥類で，家禽（かきん）の一つ。祖先種は東南アジアに広く野生するセキショクヤケイ（赤色野鶏）とされているが，このほか，インド西部のハイイロヤケイ（灰色野鶏），スリランカのセイロンヤケイ（セイロン野鶏），スンダ列島のアオエリヤケイ（緑襟野鶏）なども成立に関与したとする説もある。家畜化は前3000年ころにインドで行われ，これが東は東南アジア，中国へ，西へはイランを経て地中海沿岸諸国からヨーロッパへと広まっていった。日本には中国を経由して前300年以前に入ったと考えられ，古墳時代の埴輪（はにわ）にもニワトリをかたどったものがみられる。現代のニワトリは卵，肉などの食料生産を主要な目的として飼われているが，家畜化の初期には報晨（ほうしん）（時を知らせること），闘鶏，愛玩が主目的であった[3]。

③ 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』

東南アジアやインドに生息していた（現在も野生しているが）ヤケイが，いつごろから人に飼いならされ，どのような経路で全世界に広まっていったかについても諸説がある。インドではすでに紀元前3200年ごろに飼われており，一般にはこれが，東南アジアおよび中国に，またペルシャ（イ

ラン），シリアをへて地中海沿岸諸国から西ヨーロッパに広まったと言われる。しかし，他の説によれば，マレー半島で先に家禽化され，それがインドや中国に伝わったともいう。いずれにせよ，すでに紀元前3000年以前に人に飼いならされ，中国およびペルシャをへて全世界に広まったことについては異論がない[4]。

以上の解説を定説を踏まえて要約すれば，鶏とは①キジ目キジ科に属する家禽で，セキショクヤケイ（赤色野鶏）を祖先種とする[5]；②この野生種が今から約5,000年以上も前にインドで家禽化され，東は東南アジアや中国，西はペルシャを経て全世界に広がった；③我が国への渡来は中国経由で，2,300年以上も昔である；④家畜化の初期には報晨，闘鶏，愛玩が主たる目的であった；⑤しかし，今では主に卵用，肉用，卵肉兼用として飼養され，その品種も極めて多い，となろうか。

2

以上の点を踏まえた上で順を追って見てみよう。最初に，セキショクヤケイ（英名＝red jungle fowl）について。『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』は次のように述べている。

セキショクヤケイは単にヤケイ（野鶏）ともいい，キジ科ヤケイ属の1種で，ニワトリの祖先（あるいはそのひとつ）としてよく知られている。からだはニワトリよりずっとたくましいが，くちばしはニワトリと同じく，鋭くて短い。雄は全長60～70センチで，黒く長い（28～34センチ）尾をもっている。頭，後頸（こうけい），腰の羽毛（うもう）は細長く，先が槍状にとがっており，とくに後頸の羽毛は長くて，肩をおおう頸羽（くびのまわりの飾り羽）となっている。羽色は，頭と腰が黄色みを帯びた褐色（かっしょく），頸羽が褐色と黄金色で，腹面は全体に黒く，背中は赤褐色と黒である。顔とのどには羽毛

がなく，赤い皮膚が裸出しており，ニワトリのような赤いとさかと一対の肉ひげ（あごの下についた肉垂れ）があるが，あまり大きくはない。あしはきわめてじょうぶで，おそろしく大きく鋭いけづめがある。雌は雄より小さく，全長45～50センチ，背も腹もじみな茶色で，頸羽の部分だけがやや黄色い。尾も短く，とさかも非常に小さくて，肉ひげやけづめはない。

インド北西部からインドシナ，マレー半島にいたる一帯，スマトラ，中国南部，南海島などに分布し，また，フィリピン，インドネシア，ポリネシアの島々には輸入されたものが野生している。この鳥は森林性で，深い森林か低い木のびっしりはえたところにすんでいるが，えさを人家の付近や畑であさるので，あまり人里離れた山地ではみかけない。

えさはおもに穀物，草木の種子や根，農作物の若芽だが，昆虫（こんちゅう），トカゲ，カエル，小さなヘビやカニなども食べる。えさをあさるのはもっぱら夜明けから朝9時ごろまでと，午後3時過ぎから日暮れまでの時間帯にかぎられ，日中は暑さを避けて木の上で眠っている。この鳥は，繁殖様式にかぎらず，ふだんの生活様式においても一夫多妻で，1羽の雄が他の雄との激しい争いによって獲得した5，6羽の雌といつもいっしょに暮らしており（ただし，地方によっては一夫一婦の生活を送っている），食事の時間になると，雄に率いられた一群となって森を抜け出し，丘陵や畑を荒らしまわる。

現地の人たちは，鉄砲で追いかけたり，ジャングルの中におとりの雄をおいてわなをしかけたりしてこの鳥を捕らえようとするが，なかなかつかまらない。というのも，ヤケイは走るのがおそろしく速く，隠れるのも巧みで，人間の裏をかく腕にたけているからだ。しかし，ニワトリと同じく飛ぶのは苦手で，わずかの距離しか飛ばない。鳴き声もニワトリと同じで，雌も抱卵（ほうらん）中以外はよく鳴く。

繁殖は年2回行われるが，その時期ははっきり決まっておらず，1月か

ら10月まで，いつでもどこかで卵が見つかる。しかし，3～5月ごろがいちばん多い。巣は地面の浅いくぼみに葉や草を敷いたものだが，落ち葉の上に直接卵を産むこともある。たいていはタケやぶや深い茂みのなかにあり，うまく隠してある。卵はクリーム色で，ニワトリのものとよく似ているが，それより少し小さい。1腹の卵数はふつう5～7個で，雌だけが抱卵し，ひなも雌だけで育てる。雄は全く卵やひなには見向きもせず，他の雄に雌をとられないようにと，そればかりに注意を払っている[6]。

と見てくれば，鶏とはそもそも一夫多妻であり，そのせいか雄は極めて闘争的であると言えよう。次に，鶏の起源地とその家禽化の過程について。平凡社の『世界百科事典』は次のように述べている。

家鶏の起源地は，インド，ミャンマー，そして東南アジアの山林に接した村落においてであろうと考えられている。この地域では，周囲の山林にいる野生のセキショクヤケイ *Gallus gallus* と家鶏とは遺伝的に連続しており，ヤケイの雄は里を訪れ，農家に放し飼いにされている家鶏の雌と随時交尾している。つねに野生の血が家鶏に流入しているわけで，このような状態は家畜化の初期から連続してみられたと考えられる。雑草的なかたちで人里に近づき，家付き化するというかたちで人になれながら，なお野生の血を失わなかったというわけである[7]。

3

第3に，「家禽化の初期には報晨（ほうしん），闘鶏，愛玩がその主目的であった」という点について。最初に，「報晨（時を知らせること）」の観点から。《夜明けを告げる鶏》とは，換言すれば「暗黒の夜を追い払い，光明の太陽を呼び出す神秘な鳥」[8] を意味し，必然的に「太陽崇拝」と結び付く。事実，「古代インドでは，この鳥を霊鳥として尊重し，食用とすることを法的に禁じた。中国でもニ

ワトリは霊鳥とされた」[9]；「中世ヨーロッパでも雄鶏は太陽の象徴であり，悪魔を追い払うものとされ，しばしば教会や家屋の屋根にその模型がとりつけられた」[10] という。

鶏が「暗黒の夜を追い払い，光明の太陽を呼び出す神秘な鳥」として登場する文献が我が国にある。現存する日本最古の歴史書，『古事記』（712年献上）である。その場面は「天照大神と須佐之男命」の4：「天の岩屋戸」。内容は，天照大神が天の岩戸に身を隠して，世界が暗闇になった時，八百万の神々が集まって相談した結果，常世の長鳴鳥を出来るだけ集めて鳴かせ，天宇受女命を踊り狂わせて，天照大神をこの世に引き出したというもの[11] である。これは，言うまでもなく，鶏にまつわる象徴神話であるが，この箇所とは別に，鶏は八千矛神（後の大国主命）の求婚歌にも登場している。命は越の国に沼河比売を訪ね，次のように歌う。

> 嬢子［沼河比売］の　寝すや板戸を　押そぶらひ　我が立たせれば　引こづらひ　我が立たせれば　青山に　鵺は鳴きぬ　さ野つ鳥　雉はとよむ　庭つ鳥　鶏は鳴く[12]
>
> （大意）「おとめが寝ていらっしゃる家の板戸をしきりに押しゆすぶって，わたしが立っていると，しきりに引っぱって，わたしが立っていると，青山に鵺鳥が鳴きました。野の鳥の雉も鳴き立てます。庭の鳥の鶏も鳴きます。」[13]

この『古事記』が，鶏の登場する我が国最初の文献である。また伊勢神宮で鶏が聖鳥として飼養されているのは，天照大神がこの神宮の祭神だからである。ついでながら，『古事記』と並んで有名な『万葉集』にも鶏の登場する歌は14首あり，大半は《夜明けを告げる鶏》に関するものである。その中から3首紹介したい。

①［2021 番］柿本人麻呂：「遠妻と　手枕交へて　寝たる夜は　鶏がねな鳴き　明けば明けぬとも」[14]

（大意）「いつも遠く離れて住む妻と，やっと手枕を交して寝ることのできたこの夜は，　鶏よ，鳴き立てないでおくれ，たとえ夜は明けはなれても。」[15]

②［2800 番］詠み人知らず：「暁と　鶏は鳴くなり　よしゑやし　ひとり寝る夜は　明けば明くとも」[16]

（大意）「もう暁だと，時を告げて鶏が鳴き立てている。ええい，どうせ独りで寝ているこんな夜なんか，明けるなら明けたってかまうものか。」[17]

③［3094 番］詠み人知らず：「物思ふと　寐ねず起きたる　朝明には　わびて鳴くなり　庭つ鳥さえ」[18]

（大意）「物思いに沈んで一目も寝ずに過ごした夜明けには，いかにもわびしそうに鳴いている。鶏までが。」[19]

では第 2 に，「闘鶏」の観点から。ここで主役を務めるのは雄鶏である。ちなみに，鶏のラテン語名 *Gallus gallus* var. *domesticus* の gallus とは「雄鶏」の意。雄鶏のイメージ・シンボルの一つとして，J. C. クーパーは「戦闘的性格をあらわす」[20] と述べている。雄鶏の闘争性は正に「親［赤色野鶏］」譲りであり，学者の間で「鶏の家禽化の最初の動機＝野鶏の闘い」という説が，かなり有力視されている。[21] というのも，「野鶏のオスは，横で人間が太鼓をたたいても，ケンカをやめないといいます。それは人間の立場からみると，遊びとして実に面白いもの」[22] だからである。では，闘鶏の歴史を見てみよう。

（鶏は）時代をさかのぼって古代に限ってみると，意外にその分布は限られていたようである。例えば古王国時代のエジプト（前 2654-前 2145），

また古代初期のギリシア（前1000ころ）では，鶏は，まだ知られていなかった。前1600年ころインド・アーリヤ人が，アフガニスタンからガンガー河畔のインダス文明世界に移動してきたとき，彼らはこの地で初めて家鶏を見いだしたという。しかも，そこでは闘鶏競技さえ行われていたという……フィリピンやマレー半島では，バンキバヤケイの雄を捕らえ，飼いならし，闘鶏用に用いる。東南アジアでの広い闘鶏競技の分布をも考えあわせると，もちろん狩って食肉用にするということもあったであろうが，むしろ半野生的な里づき鶏を飼いならして闘鶏をさせて楽しむという動機が，鶏の家畜化の初期には働いていた可能性がある。[23]

この闘鶏競技は，やがて東は中国，日本へ，西はペルシャを経てヨーロッパへと広がる。事実，専門書にも「古代ギリシアでは闘鶏がさかんに行われ，ローマでは大衆の娯楽として定着した」[24] とある。その中で雄鶏は，西洋古典神話の世界で軍神アレス（ローマ神話ではマルス）や，知恵・学芸・工芸・戦術の女神アテナ（ローマ神話ではミネルバ）の聖鳥となる。古代ギリシアでは《雄鶏＝軍神の聖鳥》であったが故に，ギリシア軍の司令官テミストクレスはペルシャ軍とのサラミスの開戦（前480）に際し，自軍に対して「勝利の名誉だけに命をかける鶏の勇気をたたえ，〈諸君は同胞のため，神々のため，祖先の墓のため，なかんずく自由のため戦っているのではないか〉と激励して勝利に導いた」[25] という。ちなみに，『グリム童話』の有名な話に，雄鶏が果敢に奮闘して，悪党の泥棒一味を撃退するのに一役買う「ブレーメンの音楽隊」がある。

一方，闘鶏が庶民の間で大流行するのは，中国では乙酉生まれで闘鶏を愛好した玄宗（685-762）の唐代，日本では軍鶏（しゃも）が導入された江戸時代，英国ではヘンリー8世（1500-47）の時代であるが，特筆すべきは第3番目の時代である。というのも，闘鶏好きのヘンリー8世の時代に闘鶏の試合ルールが定められ，それが近代ボクシングにそのまま準用された，[26] と言われているからである。荒俣宏氏が「ボクシングとは，人間が代行した闘鶏だった」[27] と言うのも

宜なるかなである。ちなみに，我が国で軍鶏を「シャモ」と呼ぶのは，この原種が江戸時代にシャム国（現代のタイ）から渡来したことに由来する。

ここで考慮すべきは，この闘鶏競技がその勝敗による卜占（うらない）へ発展した，という点である。このことにまつわる有名な故事が本邦にある。言い伝えによれば，源平合戦のおり，熊野別当湛増（武蔵坊弁慶の父と伝えられる）は源氏と平氏の双方より援軍の要請を受け，神意を占うために社前で紅・白の鶏を闘わせ，白組の鶏が勝ったことから源氏に味方することを決め，熊野水軍を率いて壇ノ浦に出陣し，源氏を勝利へと導いた，という。また西洋の故事に関しては，平凡社の『世界大百科事典』に「カール大帝も国を分割するときに闘鶏で決めた」[28] とある。東西いずれの場合も《鶏＝「霊鳥」》という見方が，その下地にあったものと思われる。

4

では第3に，「愛玩（観賞）」の観点から本邦の鶏を見てみよう。というのも，この分野では我が国は世界に冠たる名鳥や珍鳥を数多く有しているからである。具体的に言えば，《雄鶏の鳴き声を観賞する長鳴鶏としては，東天紅，声良，唐丸》，《美しい姿態を楽しむ愛玩鶏としては，小国，地鶏，尾曳，蓑曳，黒柏，鶉尾，比内鶏，地頭鶏，烏骨鶏，矮鶏》，それに国際的に有名な《尾長鶏》がある。これらは全て我が国で作出されたもので，前者の13種は本邦の「天然記念物」に，後者の尾長鶏は「特別天然記念物」に指定されている。ここでは愛玩用日本鶏の中でも，とりわけ有名な東天紅，小国，矮鶏，尾長鶏の4種について簡潔に紹介したい。

最初に，「体型と色合いの優美さが見る者を魅了する」[29] 東天紅は高知県原産で，「日本古来の地鶏のショウコクを改良したもので20秒以上鳴きつづけることもある」。[30] ちなみに，鳥名は「東の空が紅くなったのを知らせる意をこめた当て字」[31] とのこと。次に，小国は「日本の代表的な地鶏で平安時代に（一説によると，遣唐使によって）中国からもたらされた。その優美な体型と美し

い羽装はむかしから多くの人びとに愛好され数多くの品種が，ここから分離作出された」[32] という。

第3に，矮鶏（ちゃぼ）は「日本で作出された芸術品」[33] と称えられ，「愛玩種中の王者にして，長尾鳥（ちょうびけい）と共に本邦の誇りとする銘鶏」[34] と言われるが，なかでも桂矮鶏（かつらちゃぼ）が最も有名である。これは，江戸時代に突然変異を利用して作出された様々な矮小（わい）鶏の一つで，「雄で675グラム，雌450グラムほどしかない。肉冠が発達しており，羽色も美しい［体は白，尾は黒，鶏冠（とさか）と一対の肉鬚（顎の下についた肉垂れ）は赤］」，[35] 実に可愛い小鶏である。ちなみに，矮鶏の語源は，原産地のベトナム南部にあった古代王国チャンパ（占城）に由来する。

最後に，世界的に有名な尾長鶏は，高知県原産で「江戸時代に土佐でショウコクの突然変異を利用して作出された。ふつうのニワトリは年1回換羽するが，この鳥の尾は何年もはえかわらないので，ときには7メートル以上にもなる」。[36] これは一般的概説であるが，今少し具体的に見てみよう。専門書によれば，①「小国鶏（しょうこくけい）の特徴は，尾羽が長くのびること，鳴き声が長鳴きであることなどだが，江戸後期に武市利右衛門という人が飼っていた小国鶏の尾羽が並外れて長くなったのがオナガドリの誕生とされる。尾羽は，参勤交代の行列の先頭で振りかざす毛槍用の羽として珍重され，他藩への持ち出しは卵ですら一切禁止された……（尾羽は）通常，長さが5～6m前後までのびるが，記録では12m以上までのびた個体も確認されている。尾羽が長くなるのはオスだけで，メスの尾は短く，他のニワトリと大きな差はない」[37]；②「天然記念物17種のうちいちばん早く指定され，昭和27年にはただ一つの特別天然記念物となった。鳥鶏で世界一長い尾羽をもっていることがいちばんの特徴。世界の鳥類学者にとっては驚異の鶏であり，その謎はいまだ学術的に解明されていない」[38] とのことである。

では第4に，「卵用，肉用，卵肉兼用の品種」について簡潔に見てみよう。最初に，《卵用鶏の代表種》は白色レグホンと黒色ミノルカである。前者はイタリア原産で，アメリカで改良された品種。鳥名は，この鶏が積み出されたイ

タリアのレグホン港に由来する。全世界で最も普及している卵用種で，我が国でも卵用鶏の約8割はこれである。後者の黒色ミノルカは地中海のミノルカが原産地で，イギリスとアメリカで改良されたもの。次に，《肉用の代表種》は「白色プリマスロックと白色コーニッシュ種」[39] である。いずれもブロイラー（肉用若鶏）の生産のためにアメリカで作出された品種であり，「こんにち，世界じゅうで生産されている肉用若鳥の大部分は，この白色プリマスロック雌と白色コーニッシュ雄との交雑種で（ある）」[40] と言われている。最後に，《卵肉兼用の代表種》は，横斑プリマスロックとロードアイランド・レッドである。両者はいずれもアメリカが原産地であるが，とりわけ前者は世界各国に輸出され，肉質は最高にして，「雌は160日ごろから産卵をはじめ，その後の360日間に230～260個産卵する」[41] という。

5

ここまで見てきたところで，お復習（さら）いと補足を兼ねて鶏にまつわるイメージ・シンボルについて総括的に見てみたい。その起点となるのは《夜明けを告げる》という雄鶏の機能である。というのも，「雄鶏の鳴き声で目をさますことは，鶏を飼っていた地上の人間が，幾千年も続けてきた暮らしかたであるが，昼が訪れ，夜が終わったと告げるのが，なによりもこの雄鶏」[42] だからである。

ではギリシア・ローマの世界から。夜明けを告げる雄鶏は「太陽の象徴」[43] と見なされ，西洋の古典神話では太陽を擬人化した神，ヘリオスやアポロン（ローマ神話ではアポロ），ひいては「ゼウスの公式の伝令使」[44] を務めるヘルメス（ローマ神話ではメルクリウス；英語で言えばマーキュリー）の聖鳥となる。つまり，雄鶏は「先ぶれ，伝達者として，神の使者マーキュリーを連想させる」[45] のである。ただし，これとは別に，雄鶏がヘルメスに捧げられているのは，ヘルメスが商業の神であり，「雄鶏は時をつくることによって人々を仕事につかせるからである」[46] という説もある

また《夜明けの告知》は「太陽の再生」[47] に繋がり，ここから《雄鶏＝「復活」[48] の象徴》となる。このため，古代ギリシアでは「重病から回復したとき（「死の入口」から帰還したとき），人々は医神アスクレピオスに雄鶏を捧げた」[49] という。このしきたりに言及した有名な言葉がある。ソクラテス（470？-399B. C.）の遺言である。この哲人は服毒する前に，友人のクリトンに「アスクレピオスに雄鶏を一羽借りている。負債をかえしておいてくれ[50]（“Crito, we owe a cock to Aesculapius ; please pay it and don’t let it pass.”）[51]」と言ったという。これは「ソクラテスの最後のユーモアであって，神性を具えた医師に人生の病を治してもらうことになるよ，と言ったのだ」[52] と一般には解されている。

しかし，この点に関して「そこに雄鶏に与えられた霊魂導師の役を見なければならない。雄鶏はあの世に死者の魂の到着を告げに行き，そこへ魂を導くのである。魂はあの世で新しい光に目を開くだろう，それは新生に等しい。ところで，アポロンの息子［アスクレピオス］こそ，その医学の力によってこの世で多くの死者の蘇生，すなわち天上での再生の予示を行ったあの神なのであった」[53] という説もある。ちなみに雄鶏は，《闇夜［死］を追い払い，光［生］を呼び戻す》が故に，医神アスクレピオスに捧げられた聖鳥となったものと思われるが，これについては「〈早寝早起きは人間を健康にする〉から」[54] という説もある。

では同じ観点から，キリスト教に於ける雄鶏のイメージ・シンボルについて見てみよう。最初に，《夜明けの告知者》である雄鶏は，①「悪霊と暗黒を退散させるキリスト」[55] を，並びに「光をもたらす者」として；②「比喩的にキリスト教徒，福音を説く人」[56] を表す。次に，《雄鶏＝「復活」の象徴》から，キリスト教徒の墓石の上に見られる雄鶏の意味が理解できる。第3に，「復活」と言えば，キリストの復活の象徴であるイースター・エッグが有名であるが，これは「キリスト教以前には，春分における生命の新たな誕生と甦りの象徴であった」[57] という。第4に，雄鶏が夜明けを告げる前に，3度イエスを否認し

た聖ペテロとの関連で《雄鶏＝「人間の弱さと後悔」[58]》を表す。

ところで，教会の風見が雄鶏の姿をしているのは，ペテロが雄鶏の鳴き声で覚醒（かくせい）・改悛（かいしゅん）したという故事に基づく，というのが通説である。ただし，これには異説があって，その力点は悪魔・悪霊払いとしての雄鶏の機能にある。その内容を紹介すれば，①「この鳥が悪魔を追いはらう力をもつという東方ペルシア起源の俗信をもととする」[59]；②「鶏は夜の悪魔を祓って光を招くというオリエントの信仰を取り入れた」[60]；③「雄鶏は不眠の警戒をあらわすことから，あらゆる方向を向いて悪霊たちを見張る風見として用いられる」[61]である。この通説と異説はどちらも首肯できるが，ジャン＝ポール・クレベールは西洋に於ける風見鶏の歴史とその意義について次のように言う。

> 雄鶏は用心のシンボルとなり，説教者の付属物となるが，これはその鳴き声，つまり福音によって人々を目覚めさせるということから来ている。13 世紀には，鐘楼の十字架の上に鉄の棒を立て，雄鶏はその上に鎮座するようになる。これは，上に述べた用心と説教とを表象している。それはまた風見鶏の役も果たしており，四方から吹く風を司り，その機嫌を予知して警戒怠りなく，悪霊を追い払う。風見鶏を立てる風習はイタリア起源のものであるが，イタリアには少なく，フランスで一般化した。[62]

ちなみに，紋章では雄鶏は「不寝番（ふしんばん）」[63]を表し，「常に横から見た形で描かれる」。[64] また風見鶏は風を受けてクルクルと向きを変えるので，後には「変節者，変化，不確定，不決断のシンボル」[65]ともなった。「政界風見鶏」という言葉は我が国でも人口に膾炙している。『英和辞書』にも「風見鶏（weathercock）」の意味として，「（考え方が）変わりやすい人，移り気［気まぐれ，無節操］な人，（特に）最新の流行［考え方］をすぐ受け入れる人，時流に乗る人」[66]とある。

6

以上見てきた《夜明けの告知者》にまつわるイメージ・シンボルだけが雄鶏の特性ではない。少なくとも次の二つがある。「戦闘的性格」と一夫多妻の習性である。最初に，「戦闘的性格」の故に，ギリシア・ローマ神話では《雄鶏＝アレス（マルス）とアテナ（ミネルバ）の聖鳥》となり，キリスト教では「戦う雄鶏は，キリストのために戦うキリスト教徒をあらわす」[67] のである。次に，一夫多妻はキリスト教倫理に反する《ハーレム》や《性愛》を連想させるが，アト・ド・フリースは雄鶏にまつわるイメージ・シンボルの一つとして，「肉欲：雄鶏は中世では〈姦通〉Adulteryのシンボルで（イコン），またモーセの第6番目のしるしに反する罪一般（神によって認められていない欲望）を表す」[68] と言う。中世の「文盲者の聖書」では十戒の第6番目は雄鶏の版画絵とのことである[69] が，これは言うまでもなく「あなたは姦淫してはならない」を意味する。

シンボルとして活躍している雄鶏の例は未だある。その用例を幾つか挙げれば，①「火災保険会社の商標」[70] となっているのは，《赤い雄鶏＝火除けの護符》[71] だからである；②「欧州の多くの学童入門読本（の表紙絵）に雄鶏が使用」[72] されているのは，雄鶏にまつわるイメージ・シンボルの一つ，「光明」が「やがて〈啓蒙〉となり，雄鶏は，新教（プロテスタント）の教育，教訓をあらわすものとなった」[73] からである；③雄鶏が「アフリカ解放運動の多くの紋章となり，ケニアが1963年独立を宣言したとき，新政府は，国家の紋章と大統領旗に雄鶏を入れた」のは，雄鶏が黎明（れいめい）を，「長い植民主義の長夜のあとの黎明」[74] を告げるからである；④「フランス人が雄鶏を，今でも国民のシンボルとして貨幣や切手にデザイン」[75] し，オリンピック競技でフランスの選手たちが雄鶏のマークを衣服に付けているのは，雄鶏のラテン語 *gallus* は “Gaulus” に通じ，「雄鶏の姿は遂にゴール［ガリア］とゴール人のシンボルとなり，ゴール人の子孫フランス人がこれを採用した」[76] からである。実は鶏の学名はこ

のゴール人［ガリア人］に由来しているのであるが，この点について山口健児氏は次のように簡明に説明している。

> 昔のガリア人は古代ローマの軍隊の主力として各地に転戦し，輝かしい武勲のかずかずをあらわしているので，ローマの人々はガリア人兵士の強敵に動ぜぬ勇猛心を讃美し，死を恐れずに鉄の距（けづめ）をつけて闘う自分たちの雄鶏のことをガルス，雌鶏のことをガリナと呼んで，ガリア人の勇敢さにあやかることを願った。
>
> 皮肉なことに往古，古代ローマ人が鶏につけた「あだ名」が，ニワトリの学名に登場してくるようになってしまったのである。[77]

なお，民間伝承によれば，①「雄鶏はキリストの誕生を告知した最初の生きもの。以来クリスマスには一晩中なく」[78]；②「すべての雄鶏と教会の屋根にとりつけられている風見鶏は，世界の終末に際して，最後の審判を告げるためになく」[79]；③雄鶏は「恋占い」を表し，「第五旬節の火曜日の最初のパンケーキを雄鶏に与えると，一緒にやってくる雌鳥の数で，娘が独身でいる年（月）がわかる」[80] という。

最後に，雌鶏（めんどり）のイメージ・シンボルについても触れておきたい。この点について，J. C. クーパーは「子孫を生むこと，食べ物を与えること，母親としての心づかい。黒い雌鶏は魔神の使いであり，悪魔がまとう姿の一つである。雄鶏と同じように鬨（とき）の声をあげる雌鶏は，女による支配，厚顔無恥な女性，をあらわす。キリスト教では，ひよこを連れた雌鶏は，信者たちを守るキリストである」[81] と簡潔に述べている。今少し詳しく解説しているのが，ジャン＝ポール・クレベールである。具体的に見てみよう。

> 雌鶏の象徴体系は雄鶏のそれとは異なる。雌鶏は，金の卵を産む雌鶏と黒い雌鶏という二つの形で動物誌に出てくる。

前者は，常に白色で，その産卵のゆえに，単なる豊饒・多産のシンボルであり，卵は常に世界の中心，あらゆる生命のゆりかごと考えられてきた。ここでは，最初に存在し，雌鶏を産んだのは，卵の方である。雌鶏は，枚挙に暇（いとま）のないほど多くの民話において，金の卵を産んでいる。そのシンボルは明白で，雌鶏を殺すと，どんな危険を冒すことになるかを人は知っているのである。

一方黒い雌鶏は，魔法使いや黒魔術の祭司たちの武器である。雌鶏は，悪魔を出現させるために，真夜中に，四つ辻で生け贄に捧げられる。[82]

7

以上鶏にまつわるイメージ・シンボルを見てきたが，今度はその語源と故事成語について見てみよう。先ず，語源について。英語で言うと，「鶏＝domestic fowl；雄鶏＝cock；雌鶏＝hen」である。最初に，fowl であるが，これは OE［古英語］では fugol と言い，「鳥」を意味する。ドイツ語の Vogel［フォーゲル］と同源で，英語の fly（飛ぶ）に繋がる。語源辞典によれば，「ME［中英語］では bird をあらわす常用語であったが，16 世紀末から〈家禽〉とくに〈鶏〉をあらわすようになった」[83] という。

なお，アメリカで chicken（「chick-［雄鶏＝cock］＋ -en［指小辞］。［小さい雄鶏］が原義」[84]）と言えば，①「雄・雌，雛・成鳥に関係なく鶏」[85]；②「鶏肉」の意味であるが，このように「常食とされる肉で，生きているときと食肉になったときと同じ語を用いるのは，英語では例外」[86] である。ちなみに，牛肉は beef，豚肉は pork，鹿肉は venison と言う。

次に，cock は古英語では cocc と言い，「雄鶏の鳴き声」から来た擬音語起源である。その鳴き声（コケコッコウ）を英語で言うと，“cock-a-doodle-doo”[87] である。なお，アメリカでは cock よりも rooster（「roost［止まり木にとまる］＋ -er［…するもの］」[88]）が好まれるのは，cock には卑語として「（勃起した）ペニス」の意味があるから。『ランダムハウス英語辞典』にも「《米》では性的連

想の強い cock を避ける傾向がある」とある。

最後に，hen であるが，古英語では henn と言い，「ドイツ語 *Henne* と同語源；ラテン語 *canere*〈歌う〉と同根」。[89] 原義として『ジーニアス英和大辞典』は「〈鳴き声〉が原義？　卵を産むと必ず鳴く」と，また研究社の『英語語源小辞典』は「原義は singer であろう」[90] と記している。では次に，日本語の「ニワトリ」の語源について。吉田金彦氏は次のように述べている。

> 歴史仮名はニハトリ。野性の鳥の意であるノツトリ（野つ鳥）に対して，農家の庭で飼う鳥，神祭りの庭にいる鳥の意としてニハツトリ（庭つ鳥）と言った。それが，カケにかかる枕詞にも用い，カケそのものでニハトリを表した。カケは，神楽酒殿歌に「鶏はかけろと鳴きぬなり」とあるようにコケコッコーと鳴く鳴き声から（東雅・倭訓栞・大言海など）というのが定説である。[91]

では，鶏（cock, hen, chicken）にまつわる，英語版と日本語版の故事成語について主なものを見てみよう。最初に，英語版から。

①「**Cock of the walk**」＝「首領，お山の大将。ニワトリを飼う場所を *walk*（鶏舎）といい，そこに，複数のニワトリを入れると，たちまち所有権を巡って争いを始めることから，この表現が生まれた。」[92]

②「**That cock won't fight.**」＝「その計画［思惑］はうまくいくまい，そうは問屋が卸さない。《闘鶏にちなむ》」[93]

③「**Cock-crow**」＝「ニワトリの鳴く時刻。夜明け。昔のユダヤ人は夜を４つの更に分けた。①「更の初まり」または「夕暮れ」（哀歌２，10），②「真夜中」または「中更」middle WATCH（「士師記」7，19），③「ニワトリの鳴く時刻」，④「あかつきの更」または「夜明け」（「出エジプト」14，24）。

Ye know not when the master of the house cometh, at even, or at midnight, or at the cock-crowing, or in the morning.（Mark 8, 35）

ローマ人は1日を16に区分し，真夜中から始めてこれを第1点とし，1区分を1時間半とした。第3番目の区分が始まる時（午前3時）を，彼らはgallicinium即ち，ニワトリが鳴き始めるとき，と呼んだ。次の区分の始まりは，ニワトリが鳴き止むときconticiniumと呼ばれ，第5番目の始まりは夜明けdiluculumと呼ばれた。

もしローマ人が午前3時の時刻をラッパを3回鳴らして告げたのなら，各福音書の間の次のような記述上の違いはどれも同じ意味であると説明がつく。つまり，「ニワトリが鳴く前に（あなたはわたしを3度知らないというであろう）」Before the cock crow（「ヨハネ」13，38：「ルカ」22，34：「マタイ」26，34）と「ニワトリが2度鳴く前に」（「マルコ」14，30）の異なった表現があるが，要するに両方の記述ともラッパが鳴り終わる前に（つまり午前3時になる前に），ということである。」[94]

④「**Apparitions vanish at cock-crow.**」＝「幽霊は雄鶏の鳴く時刻に消える。これはキリスト教の迷信で，雄鶏は教会の尖塔に設置された見張りの鳥で，神聖視されていたから，この表現が生まれた。」[95]

⑤「**That beats cockfighting.**」＝「闘鶏にまさる。闘鶏を見るよりおもしろい。考えられない，すばらしいという意味。闘鶏についての途方もない話が種々あったことにことよせた表現である。」[96]

⑥「**To live like fighting cocks**」＝「闘鶏のニワトリのように暮らす。贅沢に暮らす。闘鶏のニワトリは気力と持久力を増すために，十分な栄養で養われることから派生した表現である。」[97]

⑦「**cock- and- bull story**」＝「《口語》でたらめ話，まゆつばもの。【《1621》cockがbullに変身する中世の寓話にちなむ】」[98]

⑧「**A hen on a hot griddle**」＝「熱いフライパンの上の雌鶏。スコットラ

ンドで使われる表現。落ち着きのない人を形容している。」[99]

⑨「**A whistling maid and a crowing hen is fit for neither God nor men.**」＝「口笛を吹く娘と時をつくる雌鶏は神にも人にもふさわしくない。口笛を吹く娘は魔女 WITCH であるとされる。魔女は口笛を吹いて風を呼び起こすが，悪魔 DEVIL と結託していると考えられていた。雌鶏が時をつくるのは誰かが死ぬ前兆であると思われた。この表現の普通の解釈は，女が男っぽいのは望ましくない，ということである。」[100]

⑩「**As fussy as a hen with one chick**」＝「１羽のひよこを連れた雌鶏のように小うるさい。小さなことに心配しすぎること，あれこれやかましくて小うるさいこと。ひよこが１羽だけだと，雌鶏はそのひよこにコッコッといつまでも鳴きかけ，絶対にほっぽっておかないからである。」[101]

⑪「**Hen and chickens**」＝「雌鶏とひなたち。この図柄はキリスト教美術では，神の摂理を象徴する。」[102]

⑫「**Hen-pecked**」＝「妻の尻に敷かれた。妻の口やかましい小言を甘受し，妻に牛耳られている夫を形容する語。」[103]

⑬「**Chicken-feed, chick-feed, or chicken-corn**」＝「はした金。つまらぬ物 SMALL BEER。または比較的わずかな費用。ひよこのえさは普通，小粒の安い穀粒であるという事実による。」[104]

⑭「**chicken-hearted**」＝「気の弱い，臆病な」[105]

⑮「**Don’t count your chickens**（**before they are hatched**）**!**」＝「（かえる前に）ひなを数えるな；〈とらぬタヌキの皮算用〉（をするな）。」[106]

⑯「**Which came first, the chicken or the egg ?**」＝「ニワトリが先か，卵が先か。答えられない質問にはこのように答えるのがふさわしい。」[107]

8

次に，日本語版（中国由来のものを含める）の故事成語について。

①「**鶏鳴狗盗**」＝「［史記孟嘗君伝］（中国の戦国時代，斉の孟嘗君が狗のように物を盗む者や鶏の鳴きまねの上手な者を食客としていたおかげで難を逃れたという故事から）ものまねやこそどろのようなくだらない技能の持主。また，くだらない技能でも役に立つことがあるたとえ。」[108)]

②「**鶏群の一鶴**」＝「［晋書忠義伝，嵇紹「昂昂然如野鶴之在鶏群」］多くの凡人の中にいる一人のすぐれた人のたとえ。」[109)]

③「**鶏口となるも牛後となるなかれ**」＝「［戦国策韓策］小さい集団であってもその中で長となる方が，大きな集団の中でしりに付き従う者となるより良い，という意。」[110)]

④「**鶏を割くにいずくんぞ牛刀を用いん**」＝「［論語陽貨］鶏を料理するのに，どうして牛を料理する大きな包丁を用いる必要があろうか。小事を処理するのに，大人物または大掛りな手段を用いる必要はない。」[111)]

⑤「**鶏肋**」＝「ニワトリのあばら骨のこと。食うには肉がついていないが，味があって捨てにくい。役に立たないものでありながら，惜しくて捨てかねるものを言う。出典は『後漢書』。ところで，トリガラのスープは，大体このニワトリのあばら骨からとる。」[112)]

⑥「**鶏が先か卵が先か**」＝「いつまでたっても決着がつかないこと。」[113)]

⑦「**雄鶏自ら其の尾を絶つ**」＝「尾羽の立派な雄ニワトリは，祭の犠牲にされるので，自分でその尾を食い切って難を逃れること。転じて，才知にたけた人は，禍を未然に防ぐこと。ところで，現在，養鶏場では，ニワトリが一度に餌を多く食べられるように，その口ばしを切断している。」[114)]

⑧「**雌鳥勧めて雄鳥時を作る**」＝「夫が妻の意見に動かされることのたとえ。」[115)]

⑨「**雌鶏うたえば家亡ぶ**」＝「（めんどりがおんどりに先んじて朝の時を告げるのは不吉な兆しであるといわれるところから）女が男に代わって権勢をふるうような家はうまくゆかず，滅ぶものであるということのた

とえ。」[116]

⑩「**木鶏**（もっけい）・**木雞**（もっけい）」＝「［荘子達生］木製のにわとり。強さを外に表さない最強の闘鶏をたとえる」。[117] この成語の由来は次の如し。

紀渻子という人が闘雞の好きな王（学者によって説もありますが，一般には周の宣王ということになっています）のために軍雞（しゃも）を養って調教訓練しておりました。そして十日ほど経った頃，王が“もうよいか”とききましたところが，紀渻子は，“いや，まだいけません，空威張りして「俺が」というところがあります”と答えました。さらに十日経って，またききました。“未だだめです。相手の姿を見たり声を聞いたりすると興奮するところがあります”。また十日経ってききました。“未だいけません。相手を見ると睨みつけて，圧倒しようとするところがあります”。こうしてさらに十日経って，またききました。そうすると初めて“まあ，どうにかよろしいでしょう。他の雞の声がしても少しも平生と変わるところがありません。その姿はまるで木彫の雞のようです。まったく徳が充実しました。もうどんな雞を連れてきても，これに応戦するものがなく，姿を見ただけで逃げてしまうでしょう”と言いました。[118]

この木雞（もっけい）にまつわる有名な逸話が我が国にある。往年の名横綱，双葉山（1912-68）が 70 連勝を果たせなかった時，自分を木雞に喩えて「我いまだ木雞たりえず」と言ったという（筆者は子供の頃，父からそう教えられた）。とはいえ，この「名言」は人口に膾炙している割には，双葉山自身が使った正確な言葉（表現）と，それにまつわる裏話について熟知している人は少ないようである。そのため長くはなるが，以下に紹介したい。

私［東洋思想家・東洋古典研究家にして「平成」年号の生みの親，安岡正篤］が（双葉山に）木雞の話をいたしましたところが，大層感じ入った

らしく，それから木雞の修行を始めたのです。その後は皆さんもご存知のようにあのような名力士となって，とうとう六十九連勝という偉業を成し遂げたのであります。なんでもそのとき，私に木雞の額を書いてくれということで，書いて渡したのでありますが，その額を部屋に掛けて，朝に晩に静坐して木雞の工夫をした。本人の招きで私も一度まいりました。

今度の大戦（第二次世界大戦）の始まる直前のことでありますが，私は欧米の東洋専門の学者や当局者達と話し合いをするためにヨーロッパの旅に出かけました。もちろん，その頃はまだ飛行機が普及しておりませんから船旅ですが，ちょうどインド洋を航海中のときでした。ある日，ボーイが双葉山からの電報だと言って室に飛び込んできました。なにしろ当時の双葉山は七十連勝に向かって連戦連勝の最中で，その人気は大変なものでしたから，ボーイもよほど興味を持ったらしい。そして，“どうも電文がよく分かりませんので，打ち返して問い合わせようかと係の者が申しておりますが，とにかく一度ご覧ください”と言う。早速手に取ってみると，「イマダモクケイニオヨバズ」とある。双葉山から負けたことを報せてきた電報だったのです。なるほどこれでは普通の人にわからぬのも無理はありません。この話がたちまち船中に伝わり，とうとう晩餐会の席で大勢の人にせがまれて木雞の話をさせられたのを覚えています。[119)]

9

以上のように，古今東西，鶏のイメージ・シンボルは実に多種多様である。それらを踏まえた上で『聖書』，『イソップ寓話』，『マザー・グース』，文芸の世界に登場する鶏について具体的に見てみよう。最初に，『聖書』から。雄鶏が登場するのは5カ所。そのうち4カ所はペテロを覚醒・改悛させた雄鶏についてであり，これは4福音書の全てに記載されている。後の一つは『マルコによる福音書』（13，35）に記されているイエスの言葉にある。イエスは弟子たちに来るべき「再臨」について警告する：「だから，目をさましていなさい。

いつ，家の主人が帰って来るのか，夕方か，夜中か，にわとりの鳴くころか，明け方か，わからないからである[120]（“Watch ye therefore : for ye know not when the master of the house cometh, at even, or at midnight, or at the cockcrowing, or in the morning”）[121]」。いずれの場合も雄鶏で，第一義的には《夜明けの告知者》としての役割を演じている。

これに対して，雌鶏，それに雛（ひな）が登場するのは次の２カ所：『マタイによる福音書』（23，37）と『ルカによる福音書』（13，34）である。両者の内容は重複するので，『マタイによる福音書』で紹介する。イエスは群衆と弟子たちに言う：「ああ，エルサレム，エルサレム，預言者たちを殺し，おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが翼の下にそのひなを集めるように，わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのにおまえたちは応じようとはしなかった（“O Jerusalem, Jerusalem, thou that killest the prophets, and stonest them which are sent unto thee, how often would I have gathered thy children together, even as a hen gathereth her chickens under her wings, and ye would not !”）」。

以上のように『新約聖書』で見る限り，鶏は雌雄ともに重要な役割を果たしているようである。付言すれば，『旧約聖書』に鶏が全く登場しないのは「牧民的生活にとって，鶏は豚とともに，なじまない家畜であったのだろう」[122]という指摘がある。では次に，『イソップ寓話』に登場する鶏について幾つか見てみよう。

① The Cat and the Cock

A Cat caught a Cock, and pondered how he might find a reasonable excuse for eating him. He accused him of being a nuisance to men by crowing in the nighttime and not permitting them to sleep. The Cock defended himself by saying that he did this for the benefit of men, that they might rise in time for their labors. The Cat replied, “Although you abound in specious apologies, I shall not remain supperless” ; and he made a meal of him.[123]

「猫が雄鶏(おんどり)をつかまえて，もっともらしい理由をつけて食ってやりたいと思った。そこでまず，夜中に時を作り安眠妨害をするから，人間にとって迷惑だ，と難癖をつけた。鶏が，それはいつもの仕事へと起こしてあげているので，人間の役に立っているのだ，と答えると，今度は，「しかしお前は，姉妹(きょうだい)や御袋にまで乗りかかるから，自然の掟に背く不届き者だ」と言った。

これとても飼主の為を思ってしている。卵が沢山生まれるための配慮だ，と鶏が弁ずると，言うことがなくなった猫の奴，「お前がいつまでも言い訳に困らないからといって，俺がお前を食わぬとは思うなよ」。邪(よこしま)を好む悪しき性分は，たとえもっともらしい口実がなくても，あからさまに悪事をなす，ということをこの話は説き明かしている。」[124)]

② The Man and the Golden Eggs

A man had a hen that laid a golden egg for him each and every day. The man was not satisfied with this daily profit, and instead he foolishly grasped for more. Expecting to find a treasure inside, the man slaughtered the hen. When he found that the hen did not have a treasure inside her after all, he remarked to himself, ‘While chasing after hopes of a treasure, I lost the profit I held in my hands !’

The fable shows that people often grasp for more than they need and thus lose the little they have.[125)]

「或る人が，美しい金色の卵を産む雌鶏を持っていました。しかし，彼は雌鶏のお腹(なか)の中には金の塊があると思って，殺しましたが，ほかの鶏と変わりのないことを見出しました。彼はまとまった金(かね)を見出そうと望んで少ない利益さえも失くしました。

これは，人は現にあるものに満足して，飽くことを知らぬ欲望を避けなければならない，ということです。」[126)]

③　The Fighting Cocks and the Eagle

Two Game Cocks were fiercely fighting for the mastery of the farmyard. One at last put the other to flight. The vanquished Cock skulked away and hid himself in a quiet corner, while the conqueror, flying up to a high wall, flapped his wings and crowed exultingly with all his might. An Eagle sailing through the air pounced upon him and carried him off in his talons. The vanquished Cock immediately came out of his corner, and ruled henceforth with undisputed mastery. Pride goes before destruction.[127)]

「二羽の雄鶏が雌鶏のことで喧嘩して，一方の雄鶏が他の雄鶏を追っ払いました。負けた雄鶏は物陰の場所へ逃げて行って身をかくしました。だが勝った雄鶏は空高く飛び上がって高い塀の上にとまって意気揚々と勝ちどきを挙げました。と，思うまもなく一羽の鷲が飛び下りて来て彼を捕らえました。暗いところにかくれていた雄鶏はそれ以来何の畏れるところもなく雌鶏に近づくようになりました。

この物語は，主(しゅ)が傲れる者はこれを撃ち，へりくだれる者には恵みを垂れ給う，ということを明らかにしています。」[128)]

④　The Hen and the Swallow

A Hen finding the eggs of a viper and carefully keeping them warm, nourished them into life. A Swallow, observing what she had done, said, “You silly creature! why have you hatched these vipers which, when they shall have grown, will inflict injury on all, beginning with yourself?”[129)]

「雌鶏が蛇の卵を見つけ，入念に暖めて孵(かえ)してやった。燕がこれを見て言うには，〈馬鹿者め，どうしてそんなものを育てるのだ。大きくなったら，お前から手始めに悪さにとりかかるやつなのに〉

このように，悪性はどんなによくしてやっても直らないのだ。」[130)]

これらのイソップ寓話に登場する鶏のイメージ・シンボルは，②の《雌鶏＝「豊饒・多産」》を別にすれば，①《雄鶏＝「近親相姦を表す。雄鶏は母や妹と

交わっても恥じ入ることがない。母や妹はそのためにますます卵を生むからである」[131]；③「驕れる者久しからず」に通じる《雄鶏＝「傲慢な態度」》[132] と散々である。が，既に見た《鶏＝罪深い性愛》や闘鶏に象徴される《雄鶏＝「戦闘的性格」》，また矮鶏（ちゃぼ）に代表される《雌鶏＝強い就巣（しゅうそう）本能》を思えば素直に納得できる。要は見方や力点の置き方の違いであるが，鶏の地位が『聖書』と比べて総じて低いのが面白い。

10

ここで英語圏の国に的を絞り，最初に，英文学に登場する鶏について見てみよう。英国童謡の本源たる『マザー・グース』から雄鶏と雌鶏に関する唄を各々一つ紹介したい。先ず雄鶏から。

Cock-a-doodle-doo !
My dame has lost her shoe ;
My master’s lost his fiddling-stick,
And don’t know what to do.

Cock-a-doodle-doo !
What is my dame to do ;
Till master finds his fiddling-stick
She’ll dance without her shoe.

Cock-a-doodle-doo !
My dame has lost her shoe,
And master’s found his fiddling-stick,
Sing doodle doodle doo !

Cock-a-doodle-doo !
My dame will dance with you,
While master fiddles his fiddling-stick,

For dame and doodle doo.

Cock-a-doodle-doo !
Dame has lost her shoe ;
Gone to bed and scratched her bead,
And can't tell what to do.[133)]
「コケコッコ，コケコッコ，コケコッコ。
おくさんがおくつをなァくした。
だんなさんがヴァイオリンの弓をなくし，
どうしていいのかおおよわり。

コケコッコ，コケコッコ，コケコッコ。
おやおや，おくさんどうなさる。
だんなさんがヴァイオリンの弓をさがす，
それまで，はだしでおおどりか。

コケコッコ，コケコッコ，コケコッコ。
おくさんがおくつをなァくした。
だんなさんがヴァイオリンの弓をみつけ，
それきた，コケコッコ，コケコッコ。

コケコッコ，コケコッコ，コケコッコ。
さあさあ，おくさん，それおどろ。
だんなさんがヴァイオリンの弓をこすり，
それそれおどれと，コケコッコ。

コケコッコ，コケコッコ，コケコッコ。
おくさんがおくつをなァくした。

ねてもねられずおおよわり，
頭の髪毛(かみげ)もめっちゃくちゃ。」[134)]

この唄の背景について，専門家は「17世紀のバラッドに〈はたご屋のおかみとその息子とが犯した世にも残酷にして血なまぐさい殺人事件〉というのがある。殺された男の妹が，事件を目撃したため犯人らに舌をぬかれ，口がきけなくなっていた。ところが，なにかの拍子に口がきけるようになり，そのとき発した最初のことばが“Cock a doodle doo, Peggy hath lost her shoe”だった。これをきっかけとして殺人事件の全貌が明らかになる，というのがバラッドの筋立てだが，この妹が口にしたことばと上掲の童謡の最初の2行とは酷似しており，無関係とはいえない。どういうふうにつながるか判然としないが，一見たわいのなさそうなこの唄の根の古さと，その底にひそんでいるに違いないある伝承世界の暗さを想わせる」[135)] と解説している。では次に，雌鶏の唄について。

I had a little hen,
　　The prettiest ever seen ;
She washed up the dishes,
　　And kept the house clean.
She went to the mill
　　To fetch me some flour,
And always got home
　　In less than an hour.
She baked me my bread,
　　She brewed me my ale,
She sat by the fire
　　And told a fine tale.[136)]

「ぼくにはかわいい　めんどりがいた
　　せかいいちびじんの　めんどりさ

さらはあらうし　そうじはするし
　　こなやへこなを　かいにいっても
１じかんとは　またせなかった
　　パンをつくって　ビールかもして
だんろのそばに　こしをおろして
　　すてきなおはなし　きかせてくれた」[137)]

一読して自明の如く，男性が雌鶏に仮託して伴侶の理想像を歌った唄である。アト・ド・フリースによれば，「18 世紀では雌鶏は女を表し，童謡でよく使われる」[138)] とのことである。それにしても，童謡の世界では雌鶏の評価がなんと高いことか。

この評価と対照的なのが，詩人チョーサー（Geoffrey Chaucer［1340？-1400］）の『カンタベリー物語（*The Canterbury Tales*［1387-1400］）』（プロローグ）に登場する雌鶏である。語り手は修道院僧を評して言う：「（彼は）昔の修道院規則の教義（てきすと）などは頭から軽蔑して，羽をむしった雌鶏よりも価値がないとした[139)]（“He yaf nat of that text a pulled hen, / That seith, that hunters been nat holy men”[140)]［He gave not of the text a pulled hen, / That saith, that hunters be not holy men］）」。

とはいえ，「クリスチャン・ヒューマニズム」の詩人，ミルトン（John Milton［1608-74］）に至って，『聖書』の影響の故か，鶏は眩しいスポットライトを浴びて誇らしげに登場する。この宗教的情熱の詩人は *L' Allegro*（『快活の人』）で言う：「雄鶏は活気に満ちた声を張り上げ，かすかに明け始めた闇を追い散らし，干し草の山，納屋の戸の方へと雌鶏の前を誇らしげに歩く（“the cock, with lively din, / Scatters the rear of darkness thin ; / And to the stack, or the barn-door, / Stoutly struts his dames before”）[141)]」。

11

では，世界的劇作家・詩人のシェイクスピア（William Shakespeare［1564-1616］）ではどうであろうか。主なものを見てみたい。

①『夏の夜の夢（*A Midsummer Night's Dream*）』（2幕1場）。妖精の王，オーベロンはパックに言う；「それがすんだら一番鶏が鳴く前に帰ってこいよ[142]（“And look thou meet me ere the first cock crow.”）[143]」。

②『テンペスト（*The Tempest*）』（1幕2場）。空気の妖精エアリエルは，夜明けを告げる鶏に言及して歌う：「お聞きよお聞き，歌ってる，／あれはきどって歩いてる／雄鶏の声，／（あちこちで）コケコッコー[144]（“Hark, hark！ I hear / The strain of strutting chanticleer / Cry, Cock-a-diddle-dow.）」。

③『ヘンリー五世（*The Life of King Henry the Fifth*）』（4幕のプロローグ）。前口上で説明役は言う：「農家の雄鶏は一斉に鬨（とき）をつくり，時計は鳴って，／眠たげな朝の三時がきたことを告げています[145]（“The country cocks do crow, the clocks do toll, / And the third hour of drowsy morning name.”）」。

④『リチャード三世（*The Life and Death of Richard the Third*）』（5幕3場）。騎士のラトクリフはリチャード王に夜明けを告げる：「早起きの村の雄鶏が／すでに二度までも朝を告げる鬨（とき）の声をあげました[146]（“The early village-cock / Hath twice done salutation to the morn”）」。

既に見たように，「夜明けを告げる」鶏とは，別言すれば，あらゆる魑（ち）

魅魍魎（みもうりょう）を追い払う霊鳥でもある。だからこそ，妖魔たちは雄鶏の声を聞くと姿を消すのである。次の会話はその好例である。

⑤『ハムレット（*Hamlet*）』（１幕１場）。

BERNARDO

It was about to speak, when the cock crew.

HORATIO

And then it started like a guilty thing
Upon a fearful summons. I have heard,
The cock, that is the trumpet to the morn,
Doth with his lofty and shrill-sounding throat
Awake the god of day ; and, at his warning,
Whether in sea or fire, in earth or air,
The extravagant and erring spirit hies
To his confine : and of the truth herein
This present object made probation.

MARCELLUS

It faded on the crowing of the cock.
Some say that ever 'gainst that season comes
Wherein our Saviour's birth is celebrated,
The bird of dawning singeth all night long :
And then, they say, no spirit dares stir abroad ;
The nights are wholesome ; then no planets strike,
No fairy takes, nor witch hath power to charm,
So hallow'd and so gracious is the time.

「**バナードー**

口をきこうとしたときに鶏が鳴いた。

ホレーシオ

その瞬間にビクッとしたな，呼び出しを受けた
死刑囚のように。聞くところによると，
朝の到来を告げるラッパ手たる雄鶏が，
高らかに喉ふるわせて時をつくると，
日の神は目を覚まし，さまよい歩く
もののけたちは，水の中，火の中，地上，空中，
どこにいようとそれを耳にするやいなやたちまち
自分の領域に逃げもどると言う。その話，
嘘でないことをいまのものが証明してくれた。

マーセラス

たしかにいまのものはあの鶏の声で
消えうせたな。これも聞いた話だが，
救い主キリストの生誕を祝う季節が近づくと
暁を告げるあの鳥が夜を徹して鳴きつづけ，
そのためにもののけもさまよい歩かぬと言う。
夜は清められ，星は人を害する力を失い，
妖精は影をひそめ，魔女は通力をなくし，
神聖至福の気があふれる季節になると言う。」[147)]

なお，これ以外には《chicken＝子供》を示す次の文がある。
⑥『マクベス（*Macbeth*）』（4幕3場）。マクダフは自分の子供のことを「私の可愛い雛鳥たち」と呼んでいる。

MACDUFF

He has no children.　All my pretty ones ?
Did you say all ?　O hell-kite !　All ?
What, all my pretty chickens and their dam
At one fell swoop ?

「マクダフ

やつには子供がないのだ。子供たちみんな，
みんなだな？　ええい，地獄の禿鷹め！　みんなだな？
あのかわいい雛鳥たちみんなだな，母鳥もろとも
ひとさらいにしたと言うのだな？」[148)]

12

時計が一般に普及する以前に生きていた昔の田舎人（いなかびと）にとって，雄鶏の価値は何よりも「報晨（時を告げること）」にあったに違いない。その貴重な価値について，18 世紀に生きた聖職者にして博物学者のギルバート・ホワイト（Gilbert White［1720-93］）は，『セルボーンの博物誌（*The Natural History of Selbourne*）』（1789）の中で次のように述べている。ちなみに，chanticleer とは中世の動物韻文物語，*Reynard the Fox*（『狐物語』）の中で擬人的に登場する雄鶏で，その語源は chant ＋ clear ＝ clear singer である。

The gallant chanticleer has, at command, his amorous phrases, and his terms of defiance. But the sound by which he is best known is his crowing : by this he has been distinguished in all ages as the countryman's clock or larum［alarm］, as the watchman that proclaims the divisions of the night. Thus the poet elegantly styles him :

"..... the crested cock, whose clarion sounds
The silent hours."[149)]

「勇ましくもまたやさしい雄鶏は，色っぽい言葉でも，挑戦的の文句でも，自由自在に使い分けますが，しかし，雄鶏の鳴き方で，もっともよく知られているのは，時を告げるその声であります。この声こそ，田舎人の時計となり，目覚ましとなり，また夜のひと時を触れ知らす夜番ともなります。そしてこの声によって昔から今日まで，この雄鶏が珍重されてきた

わけであります。それで詩人は，優雅な言葉でもってそれを，

「小ラッパにて，静けき時を告ぐる
鶏冠(とさか)のある雄鶏」［ミルトン『失楽園』］

などと言っています。」[150)]

「報晨」の大役を務める主役の雄鶏。その頂点に君臨するのが，かのチョーサーの『カンタベリー物語』に登場する雄鶏君である。尼院侍僧は語る。

A yerd she hadde, enclosed al aboute
With stikkes, and a drye dich with-oute,
In which she hadde a cock, hight Chauntecleer,
In al the land of crowing nas his peer.
His vois was merier than the mery orgon
On messe-dayes that in the chirche gon ;
Wel sikerer was his crowing in his logge,
Than is a clokke, or an abbey orlogge.
By nature knew he ech ascencioun
Of equinoxial in thilke toun ;
For whan degrees fiftene were ascended,
Thanne crew he, that it mighte nat ben amended.[151)]

「この女には木の枝と空堀を四囲に囲らした養鶏場があったが，この中でチャンテクレールという雄鶏を飼ってた。その啼き声は国じゅうでどこを捜しても並ぶ鳥はなく，その音は，ミサの日に教会で鳴る楽しいオルガンの音よりも美しいものだった。

寝床で鳴く彼の啼き声は柱時計や寺院の時計より正確だった。生来，彼はこの村での昼夜平分線の昇度を知ってて，十五度昇るたびごとに精魂傾けて啼くのだ。」[152)]

雄鶏が報晨役で登場する名作は，まだ他にもある。Thomas　Gray（1716-71）

の「田舎の墓地にて詠める詩（‘Elegy Written in a Country Churchyard’）」（1751）である。詩人は「朝告げ鳥」としての鶏に言及して，次のように唄う。

The breezy call of incense-breathing Morn,
　The swallow twittering from the straw-built shed,
The cock’s shrill clarion, or the echoing horn,
　No more shall rouse them from their lowly bed.[153]

「かぐわしい匂のする朝の微風(そよかぜ),
藁屋根(わらやね)の小屋(こや)に来るつばめの囀(さえず)り,
鶏(にわとり)のするどい叫び，こだまする角笛(つのぶえ)も,
賤(しず)が屋(や)の床にねる人々の目をもう醒(さま)しはしない。」[154]

では最後に，《小説に登場する鶏》について見てみよう。ある有名な作品の中で鶏は姿なき「黒子」で登場し，無くてはならぬ要(かなめ)の役割を果たしている。その名作というのは，ローレンス・スターン（Laurence Sterne［1713-68］）の『トリストラム・シャンディ』（*The life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*［1760-67］）である。この大部の奇書は，鶏にまつわる次の成語，［a cock-and-bull story＝でたらめ話，まゆつばもの］をキーワードとして終わっている。

L－d！　said my mother, what is all this story about？－
A Cock and a Bull, said Yorick－And one of the best of its kind, I ever heard.[155]

「ああ神さま！　私の母が申しました，一体これは何の話なのでしょう！――

そりゃモー根っから他愛もない，おとおうし話（落し話）というわけさ，ヨリックが言いました――そういう類の中ではまあこれでも，もうしぶんのない話のほうなのさ。」[156]

これで英文学に登場する鶏の話はお仕舞いにして，舞台を英語圏の今一つの大国，アメリカに移して話を進めたい。

13

アメリカも又その文学もフロンティアを抜きにしては語れないが，辺境を舞台に開拓者世界の興亡を描いたのがウィラ・キャザー（1873-1947）である。この閨秀作家の「処女作」，それが『おお，開拓者たちよ！（*O Pioneers !*）』（1913）である。物語は「今から30年前」という回想形式を取って，キャザー一家が旧西部ネブラスカへ移住した1883年，吹雪の吹き荒れる1月から始まる。「人間の最大の敵は寒さである（“man’s strongest antagonist is the cold.”）[157]」と言われた開拓時代に於いて，この小説が大寒の1月から始まっているのは実に象徴的である。

厳しい辺境の大地は「とても人間の住めるような所ではなかった（“the country was never meant for men to live in.”）[158]」という作者の言葉に見られるように，〈死〉のイメージで覆い尽くされている。スウェーデンから移住して11年後，辺境の大地との苦闘の果てに，開拓者のジョン・ベルグソン氏（主人公アレグザンドラの父）は妻と4人の子供を残して，46歳の若さで「灰色の草原」の中にある丸太小屋で死を迎えようとしている。死の床で，終日ベルグソン氏の脳裏に去来するのは後に残される妻子の今後の生活。その様子を娘のアレグザンドラは幼なじみの友人に語る。

> “I think he is trying to count up what he is leaving for us.　It’s a comfort to him that my chickens are laying right on through the cold weather and bringing in a little money.”[159]
>
> 「お父さんは1日じゅう寝たままで，指折り数えてるの。多分私たちに残して置くものを，数えようとしてるのよ。お父さんはね，私の鶏がこんな寒い時でも，ずっとキチンキチンと卵を生んで，そしてそれが幾らかで

も銭になるのが気休めになるの。」[160)]

厳しい生活環境の中で，生き残りをかけて日々苦闘する辺境の開拓者。彼らにとって，鶏と言えば，一に《卵》，二に《肉》である。それ以上でも又それ以下でもない。ここには既に見た「報晨，闘鶏，愛玩」の要素は微塵もない。それは，本作品の続編：『私のアントニーア（*My Ántonia*）』（1918）を見ても明らかである。語り手ジムの祖母は，貧窮にあえぐ隣家の農業移民シメルダ一家を訪問するにあたり，作男のジェイクに言う。

> ‘Now, Jake,’ grandmother was saying, ‘if you can find that old rooster that got his comb froze, just give his neck a twist, and we’ll take him along. There’s no good reason why Mrs. Shimerda couldn’t have got hens from her neighbours last fall and had a hen-house going by now. I reckon she was confused and didn’t know where to begin. I’ve come strange to a new country myself, but I never forgot hens are a good thing to have, no matter what you didn’t have.’[161)]
>
> 「〈いいかね，ジェイク〉と祖母は言っていた。〈鶏冠（とさか）をこおらせているあの老いぼれの雄鶏がいたら，頸（くび）を一ひねりしておやり。それを私たち（シメルダ一家に）持って行こう。シメルダの奥さんは去年の秋に，隣近所から鶏をわけてもらって，なぜ今頃まで鶏小屋の一つぐらい作っていないのか，私には訳が分からないよ。あの奥さん，頭が混乱してしまって，何から始めてよいか，さっぱり見当がつかないのだと思うよ。私自身が，新規の土地へ，勝手の分からないままでやって来た者だけれど，たとえ何がなくとも，鶏だけは飼っていたら重宝だってことは，決して忘れはしなかったんだがね〉。」[162)]

このように辺境地方の人々の間で鶏は何よりも卵と食肉用として重宝され，したがって，需要も多かったが，その歴史的事実を端的に証言する大作家は他

にもいる。マーク・トウェーンである。彼は『ハックルベリー・フィンの冒険』(1884) の中でハックに次のように語らせている。

> Every night, now, I used to slip ashore, towards ten o'clock, at some little village, and buy ten or fifteen cents' worth of meal or bacon or other stuff to eat ; and sometimes I lifted a chicken that warn't roosting comfortable, and took him along. Pap always said, take a chicken when you get a chance, because if you don't want him yourself you can easy find somebody that does, and a good deed ain't ever forgot. I never see pap when he didn't want the chicken himself, but that is what he used to say, anyway.[163)]

> 「毎晩10時頃に，おらはこっそりとどっかの村に上陸してな，10セントか15セントばかしのひき割りとかベーコンとか，その他の食い物を買ったり，ときには寝苦しそうにしてる鶏をば失敬して持って帰ることもあった。オヤジがいつも言ってたこったがな，鶏は機会があったら盗んでやるもんだとよ。こっちが欲しくねえときだって，欲しい奴はごろごろしてやがんだけん。善いことをしてやれば，人は決して忘れやしねえとさ。オヤジが鶏を欲しがらねえときなんて，おら見たこともなかったけんど，とにかくオヤジはそう言ってたんだ。」[164)]

以上のことを簡潔に言えば，①《鶏＝卵と肉用の食料》；②《雄・雌の価値＝雄鶏＜雌鶏》となる。この見方は開拓期の田舎のみならず，都市とて同様である。いな，国の成り立ちから見るなら，アメリカ合衆国では時・空を問わず言えるものである。それはアメリカ史を俯瞰すれば自ずと明らかである。簡潔に見てみよう。

① 1776 「独立宣言」公布。

②「ルイジアナ購入 (1803)，フロリダ購入 (1819)，テキサス併合 (1845)，カリフォルニア，ニューメキシコ，アリゾナ等の購入 (1848) 等によっ

て，アメリカ合衆国は大西洋岸から太平洋岸に至る大国家に成長」。[165]

③ 1862 「自営農地法」制定。辺境開拓による農業の拡大に拍車がかかる一方，東部では工業が急激に発展。

④「1861-65 の南北戦争の終結後，産業資本主義体制が主導権」[166] を握る。

⑤ 1869　大陸横断鉄道の完成。

⑥ 1880 年以降，急激な工業化，都市化に伴い，低廉な労働力として南欧・東欧諸国より「新移民」が大量に流入。

⑦ 1881　冷蔵庫完成。「安い牛肉の時代」出現。精肉業の中心地であったシカゴでは，仕事は「完全な流れ作業」でなされ，これが後にヘンリー・フォードの自動車製造法に繋がる。[167]

⑧ 1890　国勢調査局が辺境（フロンティア）の消滅を公式に発表。この 90 年代に「イギリスに追いつき追いこして世界一の工業国」[168] となる。

⑨第一次世界大戦（1914-18）終結後，「資本主義世界の中心」[169] となる。

⑩ 1920 年の国勢調査で，都市人口が農村人口を上回り，大量生産を元にした大量消費社会の出現。[170]

14

ほぼ近代社会と共に始まり，急速に拡大する広大な領土と，産業資本主義体制主導の元でこれまた急激に進む工業化・都市化。それに「大量生産方法にもとづく生産性の向上と，人口の急増による国内市場の劇的な拡大」。[171] と見てくれば，アメリカでは鶏とは食料以外の何ものでもないことは自明である。既に見たように，卵用種，肉用種，卵肉兼用種と全ての分野で，世界をリードする鶏がアメリカで作出されたというのも宜なるかなである。この《鶏＝卵と食肉》という見方は，つまるところ《鶏＝食料》というイメージでしかない。

これでは米文学の世界で《鶏》の出る幕などないように思われるが，ない訳ではない。現代はともかく，鶏が未だ《人間に実に身近な生き物》であった辺境開拓期には，鶏を歌う奇特な文人が居る。アメリカの大詩人ホイットマンは

『草の葉』(1855),「誇り高き嵐の音楽（‘Proud Music of the Storm’)」の中で,「ああ幼い子供のころから，／魂よあなたは知っている，わたしにとってすべての音が音楽になったことを……（“Ah from a little child, / Thou knowest soul how to me all sounds became music . . .”)[172]」と歌い，その「音」の一つとして「夜明けに時をつくる雄鶏（の鳴き声)[173]（“the crowing cock at dawn”)」を挙げている。

しかし，米文学の中で鶏賛美の白眉と言えば，H. D. ソロー（1817-62）である。この偉大な思想家・文人は,『森の生活：ウォールデン』の中で自らの生き方を綴るにあたり，次のように高らかに宣言する。

> The present was my next experiment of this kind, which I purpose to describe more at length ; for convenience, putting the experience of two years into one.　As I have said, I do not propose to write an ode to dejection, but to brag as lustily as chanticleer in the morning, standing on his roost, if only to wake my neighbors up.[174]
>
> 「今回のはこの種のわたしの第２回の試みで，それをここに，より委(くわ)しく述べようと思うのである。便宜上，２年間の経験をひとまとめにする。前述べたとおり，私は〈落胆への賦〉を書くつもりではなく，止まり木のうえに立った朝の雄鶏のように昂然と誇らかに歌うのだ —— たとえわたしの隣人たちを目醒ますだけであろうとも。」[175]

自分の隣人のみならず，世界の「隣人たちを（精神的な迷妄から）目醒ます」結果となった偉大な書物。その本の中で，中心テーマを成す《自らの生き方》を何ものにも臆せず,「止まり木のうえに立った朝の雄鶏のように昂然と誇らかに歌う」と宣言する作者。鶏にとって，これ以上の名誉なことがあろうか。このH. D. ソローの鶏賛美は，疑いもなく足が地に着いたものであり，言葉にはそれ相当の重みと説得性がある。それと言うのも，次のような確かな下地があるからである。

I am not sure that I ever heard the sound of cock-crowing from my clearing, and I thought that it might be worth the while to keep a cockerel for his music merely, as a singing bird. The note of this once wild Indian pheasant is certainly the most remarkable of any bird's, and if they could be naturalized without being domesticated, it would soon become the most famous sound in our woods, surpassing the clangour of the goose and the hooting of the owl ; and then imagine the cackling of the hens to fill the pauses when their lords' clarions rested ! No wonder that man added this bird to his tame stock, －to say nothing of the eggs and drumsticks. To walk in a winter morning in a wood where these birds abounded, their native woods, and hear the wild cockerels crow on the trees, clear and shrill for miles over the resounding earth, drowning the feebler notes of other birds,－think of it ! It would put nations on the alert. Who would not be early to rise, and rise earlier and earlier every successive day of his life, till he became unspeakably healthy, wealthy, and wise ? This foreign bird's note is celebrated by the poets of all countries along with the notes of their native songsters. All climates agree with brave Chanticleer. He is more indigenous even than the natives. His health is ever good, his lungs are sound, his spirits never flag. Even the sailor on the Atlantic and Pacific is awakened by his voice ; but its shrill sound never roused me from my slumbers. I kept neither dog, cat, cow, pig, nor hens . . . .[176)]

「わたしはわたしの開墾地から雄鶏の声を聞いたことがあったかどうか，しかとはおぼえない。そこで，わたしは若い雄鶏を，鳴く鳥としてただその歌のために飼ってみるのもわるくはあるまいと考えた。この，かつては野生のインドの雉(きじ)だったものの歌声はどの鳥にくらべても異彩をはなつものであり，もし人がそれを家禽にすることなくして自然のまま生かすことができたとしたら，それは鵞鳥のガーガーごえや梟のホーホーより立ちまさって，たちまちわれわれの森の最大の呼びものとなるだろう。それから夫君のときがやんだとき，その絶えまをみたすために雌鶏がクワックワッと呼ぶところを想像して見たまえ！　人間がこの鳥を家畜のうちに加えたことは不思議はない —— 卵だのドラムスティック〔鶏の脚の下部〕はさておいても。冬の朝，こういう鳥がたくさんいる森 —— かれらの古里

の森 —— を歩いて，木のうえで野生の若い雄鶏が澄んだするどい声で鳴き，それが幾マイルも地上にひびきわたってほかの鳥のかぼそい歌をかき消してしまうのを聞くとしたら —— 考えてもみたまえ！　それは各国の人を緊張させるであろう。誰だって朝早く起き，自分の生涯の１日１日をますます一層早く起き，ついにはいうにいわれぬほど健康になり，富み，そして賢くならないものがあろうか。この外国の鳥の歌声は，すべての国の詩人によって，その国生まれの歌鳥の調べとともに褒めそやされている。雄々しい雄鶏はいかなる気候にも合う。彼はその土地生まれの者よりかえって土着的である。彼の健康はつねにすぐれ，その肺臓は健全で，精神は決してひるまない。太平洋，大西洋上の水夫さえ彼の声で目ざまされる。けれどもそのするどい声はわたしを決してわたしの熟睡からゆりおこしたことはない。わたしは犬も猫も牝牛も豚も鶏も飼わなかったのだ。」[177)]

「ソローは，しかし，世間からエクセントリックと見られていた」[178)] と言われている。この「変人・奇人」扱いは，アメリカの「世間」と〈H. D. ソロー〉との《鶏》に対する見方の違いにも通底する所があるのではなかろうか。一般的に言って，アメリカのような国では，また現今の日本でも「たかがニワトリ」と世間は言うかも知れない。しかし，「されど……」と異を唱え，鶏を愛でる孤高の「変人・奇人」は，僅少であれ，確かに居るのである。

「たかが」と「されど」。いずれにせよ言葉で言えば，僅か３文字である。だが，両者の間には天地の差がある。勿論，「天」は「されど」の方である。『聖書』の言葉を借りて換言すれば，「幸いなるかな，〈されど鶏〉と言う人々よ」となろうか。人間と鶏との係わりは優に5,000年を超える歴史を有するのである。この悠久の時の流れの中で生み出された豊かな東西の《鶏文化》や我が国が世界に誇る数々の愛玩鶏を思い見れば，とても「たかが……」と言えたものではあるまい。

およそ対象への「愛」と「知」は正比例の関係にあると言われるが，太古の

昔より人間との関わり合いが格別に深い鶏などは，その典型と言えよう。つまり，奥の深い鶏について知れば知るほど鶏への愛が芽生え，また鶏への愛が深まれば深まるほど鶏について知りたくなるのである。この相関関係の中で対象への愛と知を共に深めてゆく過程，ここに人生の意義と喜びがあるのは確かである。人間の手による人工物ではなく神の創造物を相手とする時は，その思いは尚更のことである。明治，大正，昭和と波乱に富んだ時代を愛玩鶏と共に90年の歳月を生きた父の人生を想えば想うほど，その思いを強くするこの頃である。

地方の過疎・衰退化と都市部の拡大，田舎や地方から都市のコンクリート・ジャングルへと流入する人口の急増，少子・核家族化と激化する受験競争，パソコンや携帯電話の普及等々。こうした現状を思うに，我が国では人間と鶏との密な結び付きなど，もはや「今昔物語」であるように思える。この両者の乖離が鶏に対する人間の無知・無関心に繋がり，つまるところ生半可な知識で「たかが……」と言う人々を生み出している一要因なのではあるまいか。

とはいえ，無知に基づく「たかが」は何処まで行っても，所詮傲慢不遜で閉塞的な「たかが」でしかない。だが，「愛」と「知」の正の相関関係を通して「たかが」が「されど」に変わるなら，その人の価値観もまた生き方も一変するに違いない。その実例は枚挙にいとまがない。この小論が何時の日か何処かでその契機になってくれるなら，筆者にとってこれに勝る喜びはない。

＊　松山に来て3年目の今夏，急に瀬戸内の海が見たくなって自転車で出かけた。高浜に抜ける坂道の途中で一休みしていた時，不意にどこからか高らかな雄鶏の鳴き声が聞こえてきた。思わず知らず，その声に聞き惚れている内に，いつしか追憶の世界に沈潜し，我を忘れていた。「遙かな国，遠い昔」の紀州の実家だ。矮鶏（ちゃぼ）が居る，小軍鶏（こしゃも）が居る，地鶏が居る，笑顔の父が居る。一体どれ程の時が過ぎたのであろうか。ふと我に返った時，自分は今伊予の国に只一人居るのだと分かった。緑の山里を後にして長いトンネルを抜ける

と，蒼い海の匂いがした。初めて見る伊予の海は溜息が漏れるほどに静かで美しかった。想えば，「無名」に徹した父の一生は幸いの少ないものではあったが，愛玩鶏と係わっている時のみは全てを忘れて至福の表情をしていた。

久方ぶりの重い回想と忘我の体験を契機に，懸案であった本論をどうにか纏めることが出来た。これも自然豊かな「菩提の地」，伊予と松大のおかげと感謝したい。

注

1）『広辞苑』第5版（岩波書店，CD-ROM版，1998）。以下『広辞苑』からの引用は全てこの版による。
2）『国語大辞典（新装版）』（Microsoft / Shogakukan Bookshelf，CD-ROM版，1988）。以下『国語大辞典（新装版）』からの引用は全てこの版による。
3）正田陽一・本好茂一「ニワトリ」，『世界大百科事典』（日立デジタル平凡社，CD-ROM版，1998）。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
4）『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』112号（朝日新聞社，1973），p. 4.
5）Cf. 秋篠宮文仁編著『鶏と人：民族生物学の視点から』（小学館，2000），p. 57：「赤色野鶏が鶏の唯一の起源ということになる」。詳細は同書の第2章「鶏－家禽化のプロセス」と第7章「総合討論：家禽化の諸問題をめぐって」を参照。
6）同上，pp. 1-2.
7）谷泰「ニワトリ」，『世界大百科事典』
8）沢田瑞穂「ニワトリ」，『世界大百科事典』
9）荒俣宏『世界大博物図鑑　第4巻：［鳥類］』（平凡社，1987），p. 124.
10）谷泰「ニワトリ」，『世界大百科事典』
11）倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫，2000），pp. 36-8参照。
12）同上，p. 49.
13）太田善麿『古事記物語：若い人への古典案内』（教養文庫，1977），p. 53.
14）『新潮日本古典集成：萬葉集（3）』青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎校注（新潮社，1999），p. 76.
15）同上
16）同上，p. 286.
17）同上
18）同上，p. 369.
19）同上
20）J. C. クーパー『世界シンボル辞典』岩崎宗治・鈴木繁夫共訳（三省堂，1992），p. 56.

21）秋篠宮文仁編著『鶏と人：民族生物学の視点から』，p. 218.
22）同上
23）谷泰「ニワトリ」，『世界大百科事典』
24）荒俣宏『世界大博物図鑑　第4巻：［鳥類］』，p. 120.
25）谷口幸男「ニワトリ」，『世界大百科事典』
26）Cf. 山口健児『ものと人間の文化史49：鶏』（法政大学出版局，2005），pp. 67-8：「唐の玄宗に比肩する西欧の闘鶏好きの王侯は，シェークスピア劇で有名な16世紀の英国王ヘンリー八世で，彼も王室闘鶏場を作ったばかりでなく，立派な闘鶏の試合ルールまで制定した。この試合ルールがあまりによくできていたので，後に英国で近代ボクシングが盛んになったときに，この試合ルールをそのまま準用したともいわれている」。
27）荒俣宏『世界大博物図鑑　第4巻：［鳥類］』，p. 125.
28）谷口幸男「ニワトリ」，『世界大百科事典』
29）花井正光・桂雄三・本間暁監修『自然紀行：日本の天然記念物』（講談社，2003），p. 291.
30）『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』112号，p. 7.
31）『広辞苑』
32）『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』112号，p. 8.
33）小山七郎『原色　日本鶏（付外国鶏）』（家の光協会，2003），p. 70.
34）日本愛玩鶏協会編『天然記念物　チャボ：深川景義著「矮鶏」復刻・増補版』（緑書房，1995），p. 1.
35）『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』112号，p. 13.
36）同上，p. 8.
37）増井光子，蒔田明史監修.『日本の特別天然記念物』（JTBパブリッシング，2006），p. 90.
38）小山七郎『原色　日本鶏（付外国鶏）』，p. 11.　Cf. 宮地伝三郎『十二支動物誌』（ちくま文庫，1986），pp. 145-6：「尾長鶏の尾羽は，はじめ生えたのを引き抜くと，そのあとから換羽しないのがのび出て，記録によると，その長さは6メートルを超える。散歩させるときにはすり切れないように，ヒトが尾羽をもってついてゆくし，休息時には，縦に長い止め箱のとまり木にとまらせる。興奮させないために，メスのなき声はきかせないようにつとめるという」。
39）『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』112号，p. 6.
40）同上，p. 7.
41）同上，p. 6.
42）スヴェン・ティトー・アーヘン『私たちを取りかこむシンボル』湯木満寿美訳（1985，英宝社），p. 80.
43）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹，荒このみ・上坪正徳・川口紘明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛共訳（大修館書店，1984），p. 135.

44）マンドレ・ボナール『ギリシアの神々』戸張智雄・戸張規子訳（人文書院，1984），p. 108.
45）スヴェン・ティトー・アーヘン『私たちを取りかこむシンボル』，p. 83.
46）E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』加島祥造主幹，鮎沢乗光編集，鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木愼一・水脇準・宮本三恵子・吉田尚子共訳（大修館書店，1989），p. 374.
47）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，p. 135.
48）同上
49）同上
50）トレバー・レゲット『紳士道と武士道：日英比較文化論』（サイマル出版会，1973），p. 242.
51）*The Oxford Dictionary of Quotations*（Oxford University Press, 1990），p. 512.
52）トレバー・レゲット，『紳士道と武士道：日英比較文化論』，p. 242.
53）ジャン・シュヴァリエ，アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』金光仁三郎・熊沢一衛・小伊戸光彦・白井泰隆・山下誠・山辺雅彦共訳，（大修館書店，1996），p. 197.
54）E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』，p. 374.
55）J. C. クーパー『世界シンボル辞典』，p. 56.
56）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，p. 135.
57）J. C. クーパー『世界シンボル辞典』，p. 90.
58）同上，p. 58.
59）荒俣宏『世界大博物図鑑 4：鳥類』，p. 121.
60）山口健児『ものと人間の文化史 49：鶏』，p. 77.
61）J. C. クーパー『世界シンボル辞典』，p. 56.
62）ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』竹内信夫・柳谷巖・西村哲一・瀬戸直彦／アラン・ロシェ共訳（大修館書店，1971），p. 87.
63）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，p. 136.
64）ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』，p. 87.
65）スヴェン・ティトー・アーヘン『私たちを取りかこむシンボル』，p. 86.
66）小学館『ランダムハウス英語辞典』CD-ROM 版。以下『ランダムハウス英語辞典』からの引用は全てこの版による。
67）J. C. クーパー『世界シンボル辞典』，p. 58.
68）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，p. 135.
69）スヴェン・ティトー・アーヘン『私たちを取りかこむシンボル』，p. 83 参照。
70）同上，p. 81.
71）アト・ド・フリース，『イメージ・シンボル事典』，p. 136.
72）スヴェン・ティトー・アーヘン『私たちを取りかこむシンボル』，p. 82.
73）同上

74）同上
75）山口健児『ものと人間の文化史 49：鶏』，p. 70.
76）スヴェン・ティトー・アーヘン『私たちを取りかこむシンボル』，p. 87.
77）山口健児『ものと人間の文化史 49：鶏』，pp. 70-1.
78）アト・ド・フリース，『イメージ・シンボル事典』，p. 136.
79）同上
80）同上
81）J. C. クーパー『世界シンボル辞典』，p. 128.
82）ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』，p. 352.
83）中島文雄・寺澤芳雄共編『英語語源小辞典』（研究社，1981），p. 175.
84）小西友七・南出康世編集主幹『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店，2001）。以下『ジーニアス英和大辞典』からの引用は全てこの版による。
85）同上
86）小西友七・安井稔・國廣哲彌編集『プログレッシブ英和中辞典』（小学館，1980）
87）『ジーニアス英和大辞典』
88）同上
89）『ランダムハウス英語辞典』
90）中島文雄・寺澤芳雄共編『英語語源小辞典』，p. 204.
91）吉田金彦編著『語源辞典：動物編』（東京堂出版，2001），pp. 181-2.
92）E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』，p. 375.
93）『新英和大辞典（第 6 版）』（研究社，CD-ROM 版，1998）。以下研究社『新英和大辞典』からの引用は全てこの版による。
94）E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』，p. 376.
95）同上
96）同上
97）同上
98）研究社『新英和大辞典』
99）E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』，p. 837.
100）同上，pp. 837-8.
101）同上，p. 838.
102）同上
103）同上
104）同上，p. 341.
105）研究社『新英和大辞典』
106）『ジーニアス英和大辞典』
107）E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』，p. 341.

108）『広辞苑』
109）同上
110）同上
111）同上
112）故事ことわざ研究会編『動物の格言諺事典』（アロー出版社，1976），p. 65.
113）同上
114）同上，p. 66.　Cf. 宮地伝三郎『十二支動物誌』，p. 150：「現代の養鶏の非情さは，しかし，こうした個性無視には止まらない。生後8-10週目にはカッターを用いて断嘴（たんし）が行われる。尖った嘴（くちばし）の先端を失った非武装のニワトリは，性質が穏和になり，仲間の尻をつついて出血させたり，羽や卵を食うなどの悪癖も防げて群れ飼いがやりやすく，嘴で飼料をはじきとばさないなどの効果も大きい」。
115）『広辞苑』
116）『国語大辞典（新装版）』
117）『広辞苑』
118）安岡正篤『東洋思想十講：人物を修める』（致知出版社，2007），p. 208.
119）同上，pp. 209-10.
120）本論に於ける日本語版『聖書』からの引用は全て『聖書』（日本聖書刊行会，1974）による。
121）本論に於ける英語版『聖書』からの引用は全て *The Holy Bible*, Authorized King James Version.　Electronic Text Center, University of Virginia Library による。
122）谷泰「ニワトリ」，『世界大百科事典』
123）Aesop. Fables, Electronic Text Center, University of Virginia Library による。
124）『イソップ寓話集』中務哲郎訳（岩波文庫，1999），p. 34.
125）*Aesop's Fables*, A new translation by Laura Gibbs （Oxford University Press［World's Classics］, 2002）from *Aesopica : Aesop's Fables in English, Latin & Greek* の電子テキストによる。
126）『イソップ寓話集』山本光雄訳（岩波文庫，1991），pp. 220-21.
127）Aesop. Fables, Electronic Text Center, University of Virginia Library による。
128）『イソップ寓話集』山本光雄訳，pp. 32-3.
129）Aesop. Fables, Electronic Text Center, University of Virginia Library による。
130）『イソップ寓話集』中務哲郎訳，p. 153.
131）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，p. 135.
132）同上
133）北原白秋訳『まざあ・ぐうす』（角川文庫，1984），『まざあ・ぐうす』原詩，pp. 30-1.
134）同上，pp. 130-2.
135）谷川俊太郎訳・和田誠絵・平野敬一監修『マザー・グース　②』（講談社文庫，1981），

「原詩と解説」，pp. 16-7.

136）同上，p. 43.

137）谷川俊太郎訳・和田誠絵・平野敬一監修『マザー・グース　②』（講談社文庫，1981），p. 104.

138）アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』，p. 326.

139）チョーサー『カンタベリ物語（上）』西脇順三郎訳（ちくま文庫，1988），p. 13.

140）*British Poetry and Prose : A Book of Readings*, Edited by Paul R. Lieder, Robert M. Lovett and Robert K. Root（Houghton Mifflin, 1928），p. 52.

141）同上，p. 368.

142）『夏の夜の夢』小田島雄二訳，『シェイクスピア大全　CD-ROM 版』（新潮社，2003）。以下シェイクスピア作品の日本語訳は全てこの版による。

143）*The Tempest*（1, 2）in *The Complete Works of William Shakespeare*, Created by Jeremy Hylton,〈Jeremy@alum.mit.edu〉. 以下シェイクスピアからの英語の引用文は全てこの電子テキストによる。

144）小田島雄二訳

145）同上

146）同上

147）同上

148）同上

149）Gilbert White, *The Natural History of Selbourne*（Arrowsmith, 1924），p. 200.

150）ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌』西谷退三訳（八坂書房，1992），pp. 386-7.

151）*British Poetry and Prose : A Book of Readings*, p. 60.

152）チョーサー『カンタベリ物語（下）』西脇順三郎訳（ちくま文庫，1987），p. 205.

153）*British Poetry and Prose : A Book of Readings*, p. 571.

154）グレイ『墓畔の哀歌』福原麟太郎訳（岩波文庫，1990），p. 97.

155）*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* by Laurence Sterne（Project Gutenberg, 1997）の電子テキストによる。

156）ローレンス・スターン『トリストラム・シャンディ（下）』朱牟田夏雄訳（岩波文庫，1997），pp. 289-90.

157）Willa Cather, *My Antonia*（Houghton Mifflin, 1946），p. 66.

158）Willa Cather, *O Pioneers* !（Houghton Mifflin, 1941），p. 47.

159）同上，p. 16.

160）ウィラ・キャザー『おお，開拓者よ！』岡本成蹊訳（改造社，1960），p. 10.

161）Willa Cather, *My Antonia*, pp. 71-2.

162）ウィラ・キャザー『私のアントニーア』［世界文学全集　16］濱田政二郎訳（河出書

房，1956），p. 41.

163）Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*（Puffin Books, 1974），p. 70.

164）マーク・トウェーン『ハックルベリー・フィンの冒険』野崎孝訳（講談社文庫，1976），p. 123.

165）増田義郎「アメリカ合衆国」,『世界大百科事典』

166）同上

167）亀井俊介監修『読んで旅する世界の歴史と文化：アメリカ』（新潮社，1992），p. 188 参照。

168）斎藤眞「アメリカ合衆国」,『世界大百科事典』

169）有賀貞・大下尚一『概説アメリカ史：ニューワールドの夢と現実』（有斐閣選書，1984），p. 131.

170）同上，p. 135 参照。

171）岡部直祐「アメリカ合衆国」,『世界大百科事典』

172）Walt Whitman, *Leaves of Grass*（Airmont, 1965），p. 282.

173）『ホイットマン詩集：草の葉（下）』鍋島能弘・酒本雅之訳（岩波文庫，1974），p. 87.

174）Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods,* with Introduction and Notes by Kinsaku Shinoda（研究社，1974），p. 82.

175）ソーロー『森の生活：ウォールデン』神吉三郎訳（岩波文庫，1983），p. 117.

176）Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods,* p. 125.

177）ソーロー『森の生活：ウォールデン』, pp. 168-9.

178）亀井俊介監修『読んで旅する世界の歴史と文化：アメリカ』, p. 186；この点については，斉藤眞・大橋健三郎・本間長世・亀井俊介編集『アメリカ古典文庫 4：H. D. ソロー』（研究社，1977），p. 10 参照。